



芝居を通して「浜益、いいね」と みんなの気持ちが一つになる。 だからやっぱりやめられない。

看板作品

「練part1」をつくる

「浜益小劇場」の第一作「アオウミガメの約束」は、唯一浜益にゆかりのない野外劇。それは長年、吉弘さんが温めてきた題材で、浜辺での野外劇にしたのには訳がありました。

「当時、世界的にも有名な縄文造形作家の方が浜益にいて、砂浜で個展を開いたんです。その方に作品の前で芝居をやってほしいと頼まれました」

この作品が特に忘れられないと語るのは宇野支所長で、「だって海の中で待機ですよ」。公演当日はあいにくの雨。それでも30人ほどの観客が旗揚げ公演を見守りました。

その後、団員の数を増やし、多い時には100人に迫るほど。作品も「るつって何よあ?」「トド」「さらば、浜益丸」など浜益らしいテーマを掲げ、地域の古老らへの取材を元に、独自の切り口で展開していきました。

佐々木代表と同じく、柏木地区で米農家の寺山広司副代表(56)は「白いご飯の協奏曲(コンチェルト)」の公演で自分たちの浜益米を提供し、おにぎりを観客にふるまったことが思い出で、

「浜益の米の宣伝をしてもらったのはありがたかった。今も強く印象に残っている」と回想します。

とりわけ「浜益小劇場」にとって記念碑的作品が「練(にしん)」です。2作目の公演を前に、これから

皆でどんな芝居をやるうかと話し合った際、「浜益はやっぱりにしんしかない」と意見が一致。実際にシンの親方だったという人に話を聞くとイメージがどんどん膨らんで、豊漁の時代から全くとれない暗黒時代も含めた3部作が計画されます。

中でも初の単独公演となった「練(にしん)Part1」が、ほかの作品よりも特別なのは、ニシンの不漁期に戸惑う漁師の姿を描ききった内容もさることながら、3時間以上の長い芝居であったから。登場人物の多さから「私も役者として3役くらいこなし」と吉弘さんは言い、「お客さまは長くて飽きたかもしれない。でも、私たちにとしては皆で無我夢中で作り上げた大事な作品。うちの看板の芝居ができた、という感じでした」。

浜益小劇場
脚本・監督
吉弘 文人 さん

千葉県八千代市出身。北海道大学の学生だった兄と、テレビドラマ「北の国から」に影響を受け、憧れの北海道へ。浜益在住31年。現在は浜益小学校教諭。





「浜益小劇場」は令和5年度石狩市教育委員会表彰において教育功労章を授与されました。



浜益小劇場は大切な「家」

「浜益小劇場」の現在の団員数は18人。26年目の今、その団員から「芝居をやるには肉体的・精神的にギリギリのところまで来ている」という本音がちらほら聞こえてきます。それでも稽古が始まれば、「浜益小劇場は自分にとって生活リズムの一部。舞台上に立てば自然に体が動く。そういうところまで来てますわ」と笑い、「いざとなったら腹をくくって舞台に出る。そしたらお客さんが笑ってくれてね。芝居はやっぱり面白い」と目を輝かせます。

「浜益に人の集まる場所を作りたい」と始めた宇野支所長も「最近ではセリフを覚えるのが大変」と言いながら、すでに「わが家」のような存在の「浜益小劇場」をやめる気はありません。「団員仲間は兄弟や家族も同様。ここは自分の帰る場所であり、よりどころなんです」

チケットのもぎりをしたり、お客さまを客席へ案内したりしてくれました。

「浜益の仲間たちが札幌の人に浜益を知ってもらおうと、私たちと一緒に慣れないことにも走り回ってくれて。その光景は今もすっかり目に焼き付いています」

市村合併後は、石狩や厚田地域の史実も取り上げ、まちを盛り上げようと奮闘してきた「浜益小劇場」。そんな一人一人の熱い思いを、ぜひ皆さんも会場で直に感じてください。



11/3(月・祝)公演の稽古を前にした劇団員の皆さん。今回は、楽器演奏という高いハードルもあって、やや緊張の面持ち。それでも、あうんの呼吸でお互いのやるべきことを確認し合っていました。